



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	中国につながる児童生徒をめぐる異文化適応および教育課題：文化間移動と心理的適応の視点から(審査結果の要旨)
Author(s)	李,原翔
Citation	
Issue Date	2014-03-14
URL	http://hdl.handle.net/2309/136174
Publisher	
Rights	

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

現在、日本の社会は次第に多くの外国人の移民を受け入れつつあり、それともなつて外国人の児童生徒数も増加している。外国人児童生徒の教育、心理適応に関しては、多くの教育現場では外国語の対応ができないなど、必要な情報や援助手段が見いだせず、適切に教育的援助を施せない状況も見られる。そうした児童生徒は、日本の社会の中で生きていく十分な言語、知的能力を発達させることができないまま成人していくことになり、外国とつながる子どもたちの教育は、我が国の教育における課題の一つと言える。また、現在の外国とつながる児童生徒は、多様な背景や来日理由（親の就労、帰国者、国際結婚など）を持ち、滞在期間や生活状況も大きく異なっている。本研究は、そうした児童生徒の現状を把握し、教育援助のための基礎データを得ることを目的とした。

著者は、外国につながる児童生徒の基礎的なデータを得るために、異文化適応要因、学校適応要因、日本語学習、親子関係、進路などについて多面的に、詳細な調査分析をおこなった。その際、児童・生徒や保護者の母国語も使用し、できるだけ彼らが自分の状況を表現できる工夫をした。

この研究では、来日前に児童生徒が母国で受けてきた教育や生活状況、外国人児童生徒の母国から呼び寄せが来日後の子ども心理に与える影響の検討、さらに、子どもの勉学、進路に対する意識と保護者の子育てに関する意識を調査した点など、外国につながる児童生徒の学習・適応問題の背景にあるものを検討し、より良い教育援助について検討した点において、研究の意義と独創性があると認められた。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

著者は、国内の文献の他、欧米の異文化適応に関する文献を精査し、児童生徒の異文化適応、外国人児童生徒の学校適応について先行研究や研究方法を検討した。その上で、異文化適応、学校適応などを測定する妥当性の確かめられた尺度を使ってデータを収集し、適切な数量分析を行った。

また、著者は外国につながる児童生徒本人や保護者に、日本語と彼らの母国語を併用した自由回答方式の調査、聞き取り、観察をおこなった。こうした方法を採用することによって、彼らの生活現実や日々の生活意識が鮮明になった。さらに、著者は外国につながる児童生徒の適応に関する多くの相談事例をまとめ、教育現場での複雑な適応問題の様相を示し、教育支援に必要な視点を示した。

こうしたいくつかの異なった研究法を用いることで、多面的で詳細な分析が可能になり、妥当な研究となったといえる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

外国につながる児童・生徒のデータは、言語や文化の壁のため、信頼性の高い情報や適切なサンプルを得ることは困難であると言われている。著者は外国人児童を受け入れ校、民間教室、民間サークルなどに直接出向いて調査を行うことで彼らの積極的な協力を得ることができた。その

ため、子どもの進学意識、学習・進学動機、日本と出身国の文化アイデンティティの葛藤の問題など、彼らの日常の希望や悩みを反映するデータを得ることができた。

調査結果の分析は、先行研究で確認された異文化適応に関わる要因や理論の検討やそうした要因の相互連関をみるために、因子分析、パス解析など多変量解析を使用し、量的な分析を適切に行った。こうした分析は審査委員から妥当なものと評価された。

また、適応問題の事例を提出することで、教育の現場の複雑で多様な現実も正面から掘り下げ、教育実践、教育支援について考察した点も高く評価された。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

著者は独自に収集した児童生徒の異文化適応、学校適応、日本語学習、進路選択、文化アイデンティティの要因などについて得られたデータを慎重に、先行研究の知見、教育現場での実践者のニーズ、子どもたち保護者との交流経験などを使って様々な観点から考察し、異文化に育つ子どもたちの現状について、実践的かつ学術的レベルの高い結論を導きだしたと認められた。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

これまで研究の難しかった外国とつながる児童生徒の適応問題（日本語学習、日本の学校での適応状態、日本社会への適応感など）について、彼らの母語と日本語を併用しながら適切なデータを収集した。その結果について統計分析をおこない、子どもに対する親の精神的サポートや本人の自己効力感などの効果を確認できたことなど、学術的に貢献できる成果があった。さらに、質的な研究でも、教育援助に関する視点（親子関係、子どもの人間関係、子どもの呼び寄せ等）を示すことができた点は、高く評価された。

全体として、本論文は日本における異文化教育、特に心理的側面に関して有意義で、成果を生み出した研究と認められた。またこの研究の成果の一部は、**International Journal of Progressive Education** に論文が採用されるなど、国際的にも認められた。従って、審査委員会は全員一致で、本論文は博士（教育学）の授与が相応しいと評価を下した。